



# ゆかりのまち

上板・石垣提携20周年記念誌



▲仁開ミサヲさん

「そりゃ誰もが知ってましたよ。私が嫁に来た頃は、ミサヲさんは確か55歳。ほんとに気丈で弱音な

みられるが、台風やマラリアで虎之助後の製糖事業も失敗する。島のサトウキビ栽培が本格的に軌道に乗ったのは戦後以降のことだ。

本吉さんは名蔵で亡くなり、20（大正9）年頃、長男の正一さんらは農業に見切りを付けて市街地で商売を始めた。

「その後、仁開の店を長年支えてきたのは、この正一ではないんです」と孫の一夫さん。正一さんは31年（昭和6）年に35歳で急逝し、妻ミサヲさんが仁開の看板を背負ってきた。

ミサヲさんもまた、現在の徳島市国府町からはるばる石垣に嫁いだ徳島の人だった。

## 徳島から嫁ぎ里心も

戦後、石垣市の仁開商店の置間では、いつも一人の女性が店番をしていた。晩年は大きな虫眼鏡を手に新聞を読むのが日課で、傍らには「文藝春秋」。島の人たちから「仁開のおばあさん」と慕われた仁開ミサヲさんだ。

んか一度も吐いたことのない人でした」  
ミサヲさんの長男敬夫さんの妻文さん（89）は、長年、二人三脚で店を切り盛りしてきた義母について懐かしそうに話す。

ミサヲさんは、現在の上板町からサトウキビ栽培のために石垣に渡った入植者の一家に嫁いだ。その経緯や当時の様子について、文さんは事細かに本人から聞いている。

ミサヲさんは1902（明治35）年1月、徳島県南井上村（現徳島市国府町敷地）の農業や養蚕を営む鎌田家の長女に生まれた。石垣に向かったのは18（大正7）年1月、まだ16歳の頃。名蔵地区の小作農家だった仁開家の長男正一さんの妻となった。

文さんは「後にしゅうとめになる仁開トクさんが、わざわざ徳島まで頼みに来たそうです。とても気の強い人で『息子には徳島の嫁でないと』と言っていたと聞きます」と語る。

トクさんは、ミサヲさんに嫁いでもらいたい一心から「にぎやかな港町で商売をしているので店番だけをすればいい」と説明していた。ミサヲさんも、見知らぬ遠い世界の「南の楽園」に憧れて結婚を決める。ところが、実際に連れて行かれた名蔵は、想像とは全く異なる寂しい風景だった。しかも、仁開家は重労働のサトウキビ栽培をな



▲大正期に石垣の市街地で商店を創業した（左から）仁開正一さん、ミサヲさん夫妻（仁開家提供）

ミサヲさんは、初めのうちは人に隠れて泣いて暮らした。徳島の母に「帰る」との電報を打ったこともある。「3度ほど、名蔵から市街地の港まで逃げ出したそうです」と文さん。その頃は航路の便数が少なく、1カ月に1度というケースもあった。結局、船には乗れず、逃げ出すたびに名蔵に連れ戻されたという。

そんなミサヲさんも、やがて島の暮らしを受け入れるようになる。トクさんも正一さんも、石

垣にやつて来た徳島の嫁を大事にしてくれ、18年11月には女の子も誕生した。

ところが、2歳を迎えたかわいい盛りのは、病で早世してしまう。20年頃、仁開家は農業から商売に転身。寂しさが募るへき地ではなく、にぎわう中心部での新生活を選んだ。

上板町出身の製糖家、中川虎之助が石垣での事業を断念してから20年余り。開拓団の中心だった仁開家のサトウキビ畑での挑戦は、悲しみの中に幕を下ろした。

## 自分のルーツ大切に

全国20番目の徳島県人会が1984(昭和59)年、本土に復帰して12年目の沖縄県に誕生した。5月末、徳島から三木申三知事が出席して那覇市で開かれた設立総会に、徳島市出身で石垣島に住む仁開ミサヲさんの姿もあった。当時82歳。上板町から石垣に向かった開拓移民の仁開家に嫁ぎ、6年の月日が流れていた。

夫の正一さんは31年に30代半ばで病死し、義母のトクさんも51年に80歳過ぎで他界。一家の支えとなって戦前戦後と商売を続け、2女1男を育て上げた。

ミサヲさんは現地で徳島新聞の取材に応じている。

「戦前は島にはお店が少なかったので繁盛したんですよ」。終戦直後については「銀行や郵便局の預金が凍結されたでしょう。あれには困り果てました」。長年の苦労をあまり感じさせない朗らかな笑顔で、そんなふうに語った。

この頃、長男敬夫さんの妻文さん(89)が商店の中心を担っていた。88年には孫の一夫さん(66)が不動産業に衣替えし成功する。

一安心して余生を送ったミサヲさんのために97年3月、家族は「仁開ミサヲ かじまや」を出版した。かじまやとは、沖縄地方で行われる数え年97歳の長寿の祝いのこと。本には、ミサヲさんへの温かな感謝の思いがこぼれている。

石垣を出て徳島の高等女学校で学んだ次女貞子さんは、母の古里を詠んだ歌を寄せた。

「軽やかな足どり艶めく芸者衆 阿波踊の輪街を染めつくし」「のどやかに鈴の音響く四国路は 菜の花畑にお遍路の列」。

翌年2月、ミサヲさんは満96歳で永眠した。石垣に渡って80年。島の人間として生き抜いたが、テレビや新聞で徳島のニュースを見るたび、とても喜んでいたという。

文さんは、一夫さんが子どもの頃、家族でミサヲさんの親類に会いに行くなど何度か徳島を訪ねている。上板町七條にあった仁開の本家も探したものの、親類は見つからず、地元寺の住職か

徳島への思いを語る仁開一夫さん(左)と母の文さん(右) 石垣市石垣



島に足を踏み入れている。

「それでも、徳島とのつながりは大切です。そう言えば先日、こんな物をいただきました。一夫さんがうれしそうに見せてくれたのは、上板町が石垣市に送った藍染のマスクだった。市役所が徳島にルーツがある仁開家や山根家に届けてくれた。

虎之助の石垣開拓団は徳島を中心に全国の出身者で構成され、香川出身や岡山出身でも総称して「徳島の人」と呼ばれた。ゆかりのまち提携20年の節目に、一夫さんは考える。「石垣では今、誰が徳島からの寄留民の子孫かよく分からなくなっている。これを機に、徳島関係のネットワークをつくってほしいですね」。

「仁開家の墓は吉野川の増水で流れたようです」と聞かされた。

世代が代わり、次第に徳島と疎遠になりつつある。一夫さんも2000年10月、上板町と石垣市の「ゆかりのまち」提携の記念式典に出席して以来、徳